

あれ、まだ5周年だったっけ？

戸田山和久 哲学者

・・というのが私の正直な思いです。なんだかもっとずっと前からブックセンターとはお付き合いしてきたような気がします。きっと、センターのスタッフのみなさんとは旧友というか同志というか、そんな感じでお付き合いさせていただいてきたからでしょう。けっこう一緒に飲みに行きましたしね！

申し遅れました。私は哲学者です。哲学者なのに名古屋に住んでいます（哲学者が住むなら京都でしょ）。妻が八戸高専の教員なので、年に数回は八戸に来ます。好きですね。八戸は。まず、食べ物がうまい。晴れた日、遠くに八甲田の山並みが見えるのがすばらしい。宇宙人もびっくり（©司馬遼太郎）の種差海岸もある。

八戸に来るとブックセンターを訪れて、棚を拝見するのが楽しみです。とくに地元の先生方がどんな本を推薦しているのだろうと興味津々です。俺の本がないじゃん、けっ。と思ったりはしません（ウソ、ちょっと思う）。

そんな私ですが、何冊か本を出版することができたので、ときどきブックセンターで講演というか、おしゃべりをさせてもらいました。そういうときは、もう自分の好み丸出しです。ゴジラとアトムを手掛かりに科学と社会の関係を考えると、昭和30～40年のアニメ主題歌をダシに啓蒙について語るとか、ホラー映画を題材に人間の心の仕組みについて語るとか。話し手がいちばん喜んでいる、そんなトークイベントです。幸い、波長の合う方々に来ていただいて、終了後も話し込んだり、常連さんでもでき、八戸に来る楽しみが増えました。

最も思い出に残っているのは、「アカデミックトーク：編集者は語る」です。私の仕事は本を書くまで、あとは出版社と本屋さんが売ってよね、と思っていたら、現実には厳しい。販促活動に著者が引っ張り出されることが増えてきたのです。たとえば、新聞や雑誌のインタビューに応じる。書店でのイベントに出演する（さすがにサイン会は嫌）。広報誌に自著についてのエッセーを掲載する。関係書籍を選んでブックフェアを企画する。「先生の本を売るためですから」という編集者の甘言に乗せられて、けっこうこき使われるのだ。

そこで、人前に引っ張り出されてばかりはもう嫌だ、こんどは私がおまえらを引っ張り出してやると思って、仲良しの二人の編集者をゲストに招き、本づくりの喜びと悲しみ？ を存分に語ってもらったのです。今度は私が聞き手役。これは楽しかった。二人とも人前で話すことに慣れていません。イベントの前に遊びに行った種差海岸で、ウニ丼を食べつつ景気づけにビールをけっこう飲み

ました。その勢いでイベントに突入したものですから、やや暴走気味。編集者の本音を聞き出すことができました。

というわけで、いつかブックセンターでやってみたいのは、この拡張版。ブックピープル・サミットです。編集者、校閲係、装丁家、出版社の営業担当、本屋さん、書評を書く人、図書館員、本を読む人、本を広める人…などなど。本にかかわるさまざまな立場の人が一堂に会して本とは何かについて語り合うイベントがやれたらさぞかし楽しいでしょう。それが実現する日まで、八戸ブックセンターのますますのご発展をお祈りします。

戸田山和久 kazuhisa todayama

哲学者

アカデミック・トーク「編集者は語る」(2017)、
「啓蒙メディアとしての懐かしアニソン」(2020)
ブックドリンクス「「ホラー×哲学」で真夏の夜を
ひんやりと」(2018)など

1958年東京都出身。名古屋大学大学院情報学研究科教授。東京大学文学部哲学科卒業、同大学院人文科学研究科博士課程満期退学。著書に『教養の書』(筑摩書房)、『論文の教室』、『恐怖の哲学』、『思考の教室』、(共にNHK出版)など。

